

# 生物多様性の保全

## 生物多様性保全の考え方

マツダは、自動車メーカーとして「経団連生物多様性宣言」の趣旨に賛同して地球環境の保全に取り組んでいます。2011年度にはマツダにおける生物多様性の取り組みを体系的に構築していくための「生物多様性に関する影響度評価」を実施し、マツダの事業活動や製品が与える自然の恵みと自然への影響の重要性を認識しました。

これを受けて2012年12月に「マツダ生物多様性ガイドライン」を制定し、企業活動を通じた生物多様性保全への貢献や、人と自然が調和した豊かで持続可能な社会づくりを目指して活動しています。

上述の影響度評価の結果を踏まえ、エネルギーや水などの「資源」に重点を置き、商品・技術および生産・物流領域において、生物多様性への影響を軽減させる取り組みを進めています。また、事業活動による生態系への影響を把握するため、専門家の協力のもと生物多様性調査を継続して実施しています。調査は、社有地だけでなく、周辺地域の環境や文献などのリサーチも併せて行うことで、地域全体の生態系の維持につながる活動を目指して取り組んでいます。

a

a 「生物多様性に関する影響度評価」プロセス

- ステップ1：評価対象範囲の選択  
(自動車関連事業とする。海外、子会社も想定するが、主に国内影響の大きいバリューチェーンを対象)
- ステップ2：生態系サービスに対する依存度・影響度の評価、生物多様性への脅威の評価
- ステップ3：生物多様性に関するビジネスリスクとオポチュニティの特定
- ステップ4：優先課題の抽出と既存対応の現状評価
- ステップ5：今後の対応の方向性の特定

**マツダ生物多様性ガイドライン**

**【基本的考え方】**

「マツダ地球環境憲章」に基づき、マツダグループは自然の恵みと自然への影響の重要性を認識し、国内・海外の企業活動を通じた生物多様性保全への貢献に努め、人と自然が調和した豊かで持続可能な社会づくりとその発展を目指します。

**【重点取り組み項目】**

<p><b>1. 環境に配慮した技術と商品の創造</b></p> <p>排出ガスの浄化、CO<sub>2</sub>の低減、クリーンエネルギー車の研究開発、リサイクルの推進や生物多様性に資する技術の開発により、環境と企業活動の調和に配慮した技術と商品の創造を推進します。</p> <p><b>2. 資源・エネルギーを大切にす企業活動</b></p> <p>エネルギーの効率的な活用、省資源・リサイクル活動により環境負荷物質の低減と資源の有効活用を推進し、生物多様性の保全に貢献します。</p>	<p><b>3. 社会や地域との連携・協力</b></p> <p>サプライチェーンおよび自治体、地域社会、NPO/NGO、教育・研究機関などの幅広いステークホルダーとの連携・協力を努め、地域に密着した活動を推進します。</p> <p><b>4. 啓発と情報開示</b></p> <p>人と自然との共生の意識向上に努め、積極的かつ自発的に行動するとともに、成果を広く社会に開示し共有します。</p>
--	--

2012年12月制定

### 取り組み事例

環境に配慮した技術と商品の創造	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SKYACTIV技術の継続的進化 (P32参照)</li> <li>・電気自動車 (P32参照)</li> <li>・リサイクルに配慮した開発・設計 (P39参照)</li> </ul>
資源・エネルギーを大切にす企業活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生産工程の設備稼働率の向上、サイクルタイム短縮 (P35参照)</li> <li>・完成車と補修部品輸送のハブ&amp;スポーク化 (P37参照)</li> <li>・工場新設時の調査・配慮</li> </ul>
社会や地域との連携・協力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林保全活動、野生生物の保護支援など*1</li> <li>・社有地での生物多様性の取り組み</li> </ul>
啓発と情報開示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マツダ財団*2を通じた助成活動</li> <li>・社会貢献への取り組みの啓発と情報開示</li> <li>・従業員に対する教育・啓発</li> <li>・マツダサステナビリティレポートなどを通じた社内外への取り組み紹介</li> </ul>

\*1 <https://www.mazda.com/ja/sustainability/social/environment/>  
 \*2 マツダ財団 <https://mzaidan.mazda.co.jp/>

社会課題解決への貢献

社有地での生物多様性の取り組み

三次事業所

三次事業所では、2016年より事業所内での生態系調査を継続して行っています。2020年度は愛媛県と広島県の一部地域のみで生息し、環境省および広島県のレッドデータブックに指定されている希少種の「アキサンショウウオ」のモニタリング調査を実施し、構内のため池に生息していることを確認しました。今後は、「アキサンショウウオ」をはじめとしたさまざまな生物との共生を目指した環境づくりに取り組んでいきます。

防府工場

防府工場では2020年に初めて、構内のため池に生息する生物種を把握するための、生態系調査を実施しました。調査の結果、約50種類に及ぶ生き物が確認され、地域の河川とのつながりが強い環境であることがわかりました。今後はこの調査結果踏まえ、地域の自然環境との共存につながる取り組みを進めていきます。

情報発信

社有地での生物多様性の取り組みや、生物多様性に関するニュースなどを、広く従業員に知ってもらうために、「生物多様性ニュースレター」を定期的に発信しています。これまでに計10号を制作しました。今後もより多くの人に生物多様性に対し、関心を持ってもらえるよう継続して発信して行く予定です。

b

b 三次事業所で確認されたアキサンショウウオの幼生



c

c 生物多様性ニュースレター

**生物多様性ニュースレター**  
VOL.10 2021年3月発行

**コロナから考える私たちの暮らしとSDGs**

2020年に流行が始まった新型コロナウイルス感染症はまだ強いが弱いです。とくられた方は日本国内では7,000人、全世界では200万人を超えました(2月14日現在)。私たちCSR・環境部も、2020年に三次テストコース、防府工場及び本社で生物調査などを予定していましたが、大きく変更せざるを得ませんでした。久しぶりの「生物多様性ニュースレター」の発行となった今回は、新型コロナウイルスを取り上げます。

**コロナは死なない？**

コロナ禍での生活を不安にしている原因のひとつは、相手が「見えない」ことでしょう。実際、コロナウイルスはとても小さく、この時期多くの人を悩ますスキ花粉や大腸菌などの細菌と比較してても、その小ささは際立っています(図1)。多くの人が、ウイルスは微生物の一種と知っていますが、厳密には生物かどうかともあいまいな存在です[1]。\*生物の定義にはいくつかありますが、①細胞を持つこと、②呼吸すること、③繁殖すること、の三つの条件を満たすというのが最も一般的です。ところが、ウイルスはこのうち①②の条件を満たしていません。ウイルスの体は、通常

図1 コロナウイルスはこんなに小さかった！

伝信物質(=)とそれを運ぶタンパク質だけでできていて、呼吸もせず、餌も食べません(図2)。寿命もないので、壊れてしまわない限り永久に存在し続け、条件が整うと繁殖だけ行うという不思議な存在なのです。しかしここでは、「まるで生きているような」彼らも広い意味での微生物と考えて話を進めましょう。

図2 コロナウイルスの構造

**人類の歴史は微生物との戦いの歴史だった！**

14世紀末に流行したスプレー(鼠疫)はヨーロッパだけで死者2,500万人以上と推定されていますし、コレラは流行する度に100~2,000万人の死者を出しました。100年前のスペイン風邪による死者は4,000万人で、この数は同時期に起きた第一次世界大戦の死者数の4倍にもなります。

感染症が昔から人類の命の脅威だったことが分かるトピビアをひとつ紹介しましょう。今年もお正月に祝い酒・お屠蘇を飲んだ方もいると思いますが、これは「屠蘇延命散(とそえんめいさん)」という薬草酒を飲み、無疫息災を願う平安時代に始まった行事の名残です。このお屠蘇の中には「屠」とは「殺す」という意味ですね。新年のお祝いにはあまり相応しくないように思えますが、屠蘇とは「毒(=疫病などの災い)を毒る」という意味で、疫病などから身を守ることで大きな関心事だったためなのです(図3)。